

---

そら

霧夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そら

### 【Nコード】

N5333A

### 【作者名】

霧夜

### 【あらすじ】

事故で家族と足を失い、空に憧れた“彼女”と、“彼女”を助けたと思った“彼”の話。

## 彼女の願い（前書き）

珍しく暖かい話を書きました。読んでもらえると嬉しいです。

## 彼女の願い

空を飛びたいと、ずっと思っていた。

見上げる空、そこでは一羽の鳥が旋回を続けていた。

無知な私には、あの鳥が何という名前の鳥なのか解らない。

でも空を飛んでいるだけで、ひどく素晴らしい存在に思えた。

あそこより上に行けたら、皆に会えるかもしれない。

幾度と無く、そう考えた。

その考えに確証などどこ何もなくて。

でも私はそれに縋るしかなかった。

私を置いて、何処かへと旅立ってしまった私の家族。

対向車線から外れ、私達の乗る車へと突っ込んできたトラック。

一緒に乗っていた父と、母と、弟と、そしてトラックの運転手。

私以外の皆が、いなくなってしまった。

私は頼るべきものと恨みをぶつけるべき存在を同時に失ってしまった。

事故の所為で松葉杖を突かなくては歩けなくなり。

明るく笑う術をどこかに置き忘れた。

そんな私には、空を望むしかなかった。

空には、家族がいるかもしれないから。  
空を飛ばば、足など不用になるから。

でも私に翼なんか無い。  
飛行も浮遊も出来はしない。

方法があるとすれば、屋上から飛び降りるくらいのものか。  
だがそれは落下であり転落だ。

落ちているだけ。飛んでいるとは言えない。

なら、どうすれば良かったのだろう。  
何が、最善の方法なのだろう。

事故の事を忘れれば、家族を裏切ったような気持ちになる。  
空を諦めれば、自らを支えるものを失ってしまう。

なら。

私は一体、どうすれば。

ねえ、誰か。

教えて下さいませんか

苦しいんです。

心が締め付けられて。

悲しいんです。

独りぼっちになって。

憎いんです。

全てを奪われて。

解らないんです。

頬を伝うこの雫の意味が。

痛いんです。

動かなくなつた足が疼いて。

声が嗄れるほどに叫んで。

泣いて、しまいそうなんです。

立ってられません。

力を無くした私の足では、膝を折る事しか出来ないんです。

お願い誰か。

一人では、答えを見付けられないんです。

一人で生きるには、世界は広く、一生は長過ぎるんです。

どうか私に、支えを下さい。

何にも隔たれない場所に行く鳥達が羨ましいんです。

太陽が瞳に眩しいよ。

空をどこまでも、飛んで行きたいよ

## 彼の想い

僕は彼女を助けたいと思った。

家族を失い、足と心に深い傷を負った彼女を。

傍で見ている僕には解った。

彼女が無理をしている事は。

いつも笑っていたけれど、その心が限界に近いのは理解できた。

彼女は気付いたら空を仰ぎ、鳥をじっと見つめていた。

空に憧れていたのか。

家族に会いたかったのか。

足を使わなくてもいい場所へ行きたかったのか。

それはよく解らない。

全て間違っているかもしれないし、全て正解かもしれない。

定かではない考えた。

でも彼女が、苦しみ、悲しみ、憎み、迷い、痛みを感じていたのは、僕にも察せられた。

彼女はずっと、笑顔で泣いていたんだ。



倒れる寸前だったのに、必死で自分の足を立たせていたんだ。

無理なんて、しなくても良かったのに。

泣いたって、誰も責めたりしないのに。

涙の存在は、格好悪くも無様でもないのに。

彼女は、とてもとても頑張り屋だったんだ。

自らの心に嘘を吐いてしまうほどに。

それも、自分すら気付かないうちに。

だからあまりにも痛ましい姿の彼女を、助けたいと思った。  
手遅れになる前に。

はつきり言って、僕には何も出来ない。

彼女を家族に会わせる事も。

彼女の足を治す事も。

彼女に空を飛ばせてあげる事も。

非力にも程があるだろう。

それでも僕には、この両手がある。

倒れても迷っても、必ず手を差し出してみせる。

彼女の肩を支え、彼女の杖になれるんだ。

“代わり”なんていう都合のいい言葉を使つつもりは毛頭ない。  
僕は僕の力と遣り方で。

彼女を、支えてあげるんだ。

僕のこの想いに、偽りなどないのだから。

彼女の願いも僕の想いも、きつと果たされる。

さあ。

笑顔で。

彼女に、会いに行こうか

## 空の下で

雲一つない蒼穹の下で。

果たされるのは。

迷い続けてきた願いと、偽りのない想い。

彼は彼女に会いに行った。

自らの誓いの元。

誰かの、大切な人の力になる事を決意していた。  
自分にどれ程の力があるのか知らなかった。

しかし非力かもしれないが無力ではないと。  
ただ強く信じていた。

手を差し伸べた先に、彼女がいた。

彼女は空を見る事をやめた。

空を、諦めたわけではない。

自らが望んだ空はここにある事を、理解したからだ。  
空の向こうに家族がいるのか定かではない。

でも眼前には確かに人が存在していて。  
その人の手を掴んだ。

視線を向ける先に、彼の姿があった。

頭上を旋回する鳥を見上げ、二人は寄り添っていた。

頬を緩やかに撫でていく風は心地好く。

太陽の光は柔らかに降り注ぎ。

透き通る空は全てを享受していた。

そこにはただ、優しさがあった。

自分にも何かが出来るのだと、彼は悟った。

翼なんかいらなかったんだと、彼女は知った。

一人より二人が。

誰かに大事だと言う事が、言われる事が。

これほど大きな力になると。

二人は胸の内で、静かに受け止めていた。

心中に溢れる気持ちは快いもので。

これがあればいつまでも大丈夫なんだと。

二人は全身で、ありのまま受け入れていた。

繋いだ手は暖かく。

傍らの存在は力強く。

肯定すべきものだった。

青く深い空はそこにあり。

その中を鳥は飛翔する。

行く鳥、帰る鳥。

回る鳥、進む鳥。

単独の鳥、家族の鳥。

蒼い世界に、ただ飛翔する。

頭上を仰ぎながら、二人はそつと。

繋いだ手に、力を込めた。

願いと想いが叶った事を。

彼と彼女は、感じていた。

## 空の下で（後書き）

時々自分で恥ずかしくなったりしながら書きました。読んで下さって、ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5333a/>

---

そら

2010年10月28日04時53分発行